

くらしと協同をたずねて01

若狭町かみなか農楽舎就農定住事業のとりくみ ～八代恵里氏 (有限会社かみなか農楽舎 体験事業責任者) に聞く

聞き手：庄司俊作 (同志社大学名誉教授)

ユニークな就農定住事業を行なっている「かみなか農楽舎」(以下、「農楽舎」という。福井県若狭町)を訪ねた。若狭町は水環境に恵まれた町である。三方五湖に日本一美しいと川・北川、全国名水百選に2つも入っている。農地は約2,000ヘクタールあり、水田が耕地全体の9割を占め、農家のうち8割以上が米づくりを行なっている。

農楽舎は2001年、「都市からの若者の就農・定住を促進し、集落を活性化すること」を目標に、就農定住事業のための研修事業をメインに据え、他にインターンシップ・体験・農業生産・直販の5事業を行う農業生産法人として設立された。出資割合は町50%、集落30%、関西の(株)類設計室グループ20%である。農業の栽培技術の習得と農村生活を理解するため農楽舎で最大2年間の長期研修(就農・定住研修事業)を受けることができ、この研修期間中に農業・農村の理解を深めながら地域との密接な関係を築いていく。

「ある意味人材育成を町から委託されている」。経済的にも自立をめざすことで、「一

貫した事業」になり、三セクでなく「有限会社」とすることで自由度が出て、「合理的で、継続的に人を育成するシステムができ」という(八代恵里さん)。当初、町の総合計画では観光農園を提案していたが、類設計から「ここに絶対必要なものをつくる必要がある。都会には農業したい若者がいる、彼らをここに連れてきて育成して、後継者をつくってはどうか」という提案が出された。行政と企業と地元の3者での取り組みは全国でもめずらしい。事業の成果は着実というべきである。卒業後若狭町に残って専業で農業に従事する若者が多い。今では全体の農地の1割以上を卒業生が耕作するまでになった。

農村にIターンする人の何割ぐらいが就農しているのだろうか。適当な統計データがないが、それほど多くないと思う。Iターンも新規就農も、密かに憧れている都市住民は少ない。ところが、農村に移り住んで農業を始めるとなると種々の障害がある。「住む家はどうする。農地や農業機械はどうしたらいい。ひとりぽっと出でやれるか、ムラの人とうまくやっっていけるか」。地方と農業の担い手の確保が喫緊の課題というなら、その確保を役割とする何らかのシステムと組織が必要というのが持論である。ということで、農楽舎のチャレンジと経験をお伝えしたい。

農楽舎の体験事業責任者の八代恵里さんと2年間の研修を卒業し今若狭町に残って



かみなか農楽舎の施設

農業をしている深川寛朗さん、山本謙さんのおふたりにお話をうかがった。なお、3名の方の語りの反訳は正確に伝えることを重視し必要最小限の訂正にとどめ、口癖、方言等もそのままとした。

1 少し本人と家族のこと

【八代】かみなか農楽舎ではこれまでの研修卒業生が45名で、うち26名が若狭町で就農定住しています。そのほか町外で就農した方が5名ほどです。もちろん、就農していない方もいます。町の直売所で働いていた人もいま



八代恵理氏

す。私は2年間の研修の後、農楽舎の職員になりました。主人も卒業生で、現在農業に従事しています。私のように卒業生どうしで結婚して子供を産み主婦となっている方もいます。人材育成や農楽舎の取り組みに興味のある人は農楽舎に職員として残っています。

一卒業生の出身地を見ると、東京や大阪、京都など都市部が多いですね。八代さんの出身地はどちらですか。また、こちらに来られる前は何をされていましたか。

【八代】出身地は大阪です。農楽舎に入る前は京都の大学で数学の勉強をしていました。数学が好きで子供好きですから、教員になりたいと思っていました。ただ農業に興味があってインターンシップなどに参加していました。その中で農楽舎に出会えたので研修を受けてそのままこちらにいます。学生時代、京都の学習塾で4年間子供キャンプのボランティアのお手伝いをして

いました。土日・夏休みすべてキャンプ・カウンセラー、キャンプ・リーダーをして過ごしました。ここで活動するうちに、机上の勉強ではなく、自然の中で子供とともに成長する取り組みがしたいと思うようになりました。たまたまその塾が農園も持っていました。そこで農業でそのようなことができないかと思うようになり大学を卒業してすぐここに来ました。農業だけではなく、この施設を使って農業体験事業をやりたいと思っていました。私が入った経緯も会社も、それで社員として残そうということになって入れていただきました。体験事業というのは農業体験や教育旅行などです。

一卒業生は皆さん、大規模に農業をやっていますね。ご主人の経営も大きいですね、12.5ヘクタールですか。若狭町の農業認定法人・認定農家が26戸ありますが、農楽舎の卒業生も認定農家に多くなっているのですか。

【八代】卒業生も認定農家になっています。主人も大阪出身で、大学は農学部でした。といっても、すぐに農業に従事したのではなく、大学院に行っていたようです。その中で農楽舎を知ってこちらに来たそうです。ここらでは20ヘクタールの経営でないといわれていますが、中山間地で天日干しとか無農薬とかを中心に直販するという経営ですので、この面積がマックスです。この面積でも特徴を出した米づくりなので、なんとかトントンの経営です。

主人は、大学の農学部を出て、大学院で研究をさせていただいていたので、前職というのはないですね。大学院というより研究生のようなことをしていました。そのころ農楽舎を知って23歳のときにこちらに来ました。認定農家さんだった親方（農家の主人をこう呼ぶ）のところで就農したん

です。親方に農地や機械をお借りして経営しはじめたのですが、本人は有機とか直販をやりたいかったので、その後親方の元を離れ独立しました。普通だったらやめて別の地域に行くところですが、しかし、農楽舎があったおかげで、この地域で別の農地を借りて再出発し農業をやってきました。

—ご主人は有機認証を受けているんですか。

【八代】 県の認証で特別栽培ですね。JASは取っていないです。消費者へ直接販売が多いので費用のかかる JAS をとらなくても、直接お客様に栽培方法も提示・説明できるのでいけています。繁忙期には私も手伝います。去年までは人を雇っていましたが辞められました。「じゃあ、今年はひとりでやってみるか！」という感じで、お手伝いがいなくてもひとりでやり切っていますね。面白いみたいです。ただ天日干しに人手がかかるので、その面積は減りましたが。無農薬で天日干しの米づくりにこだわっています。お米は都市部に向けて直販しています。主人だけでなく、卒業生の皆さんも都市部に向かって高値で売っていますね。全国の都市部です。

2 研修中に販路を見つける

—販路というのは何ですか。皆さん、販路を自分で見つけるんですか。

【八代】 まずは縁故関係です。ここで2年間研修している間、生産もしますが自分で販路を見つけるというのも課題です。2年生になると約3ヘクタールを担当するんですよ。それは、栽培計画から管理、売るところまでです。研修中に自分で得たお客様を持って卒業するんです。そのため就農した時に栽培して販路を見つければ始める必要がなくスムーズに経営開始が可能となります。卒業後の経営を見据えて

2年目には就農のシミュレーションができるようになります。そのために研修中の農閑期に営業にも行きます。やはり一番まずくのはそこだと思うんですけど、皆さん、都会からいらっしゃるのでも田舎と違って周りにお米を作っている方がいらっしゃらないので、まずは縁故関係、友人関係に販米を配ったりするところから始めます。

—農楽舎の就農定住研究事業の、「2年次研修(就農に向けた準備期間) 水稻を中心に現場責任者として計画から販売までを担う期間」というのは、そういうことなんですか。研修で販売を重視しているのは興味深いですね。

【八代】 はい。それでおいしければ口コミでということが中心にはなるんです。その他マルシェにも出たり、自分が経営したい方針での販売にはなるんですけども、農業専業で、ある程度を高値で売るとなると、こだわりの米を個人に販売することが一番利益率がよいのでそこを狙うんです。経営面積に応じて全部捌けないので、個人販売だけでなく飲食店に営業に行ったりとか、スーパーに営業に行ったりとかします。—それは個人ごとになっているんですか。

【八代】 いちおう農楽舎としてするんですけども、卒業生が個別やりたいと思えばその方がスーパーに入って試食販売したりとか、もういろいろです。卒業生のここでの就農スタイルっていうのは形がないんですよ。ある意味農楽舎はこれを作って、ここに売って、この値段で売ってくると経営が成り立つよという研修ではないです。—そういうことはご主人だけではないんですか。

【八代】 はい。皆さん、何万円もの価格で販売しています。値段のランクはいろいろあります。そういう風に行けるのが個人のいいところなのかなと思います。お客さんを持って就農しているので、それはもう

買っていただいている方のプレミアムで出しています。価格をあげるのが難しいのでどうしていくかとなると、品種を変えたりして高値のものを作っていきます。

一ご主人は精米もするのですか。

【八代】はい。精米もして、貯蔵施設と精米機を持つのか、それともそういうことをしないで農協だしするのかっていう、販売先が経営方法、投資計画の分かれ道です。卒業生は、自分で精米・出荷する直接販売の方が多くですし、加工もされより単価をあげて販売する方もいます。

3 研修のありようと地元就農

一先ほどこちょっとお聞きした農楽舎の研修のことをお聞きしていいですか。卒業生は、農業している人が多いですね。

【八代】多い方だと思います。町からはもっと多く就農してほしいという要望があります。町内定住される方には卒業時に42万円ほど就農支度金を出すなど優遇するようにはしています。研修期間中、かみなか農楽舎として研修奨励金を1年日月5万、2年日月7万渡しています。これは就農しても就農されなくても返済義務はありません。他に国の支援事業として年間150万円（準備型2年、開始型5年最大7年間）の補助制度が利用できます。こちらは多くもらえますが就農しない場合には全額返還の義務があります。なので、まだ就農に不安がある方は農楽舎奨励金のみ受け取り、途中で本気が出てきたら国の支援金に変更し受け取る方もいます。

農楽舎には研修生宿舎があり家賃と光熱費かからず費用は食費の1万円くらいです。食事は研修生が食事当番をして、自ら作っています。収穫物は無償提供ですが肉魚やお酒も欲しいのでその分が1万円くら

い（研修生の裁量で決める）です。研修生はお金を使う機会が少ないので皆さん、卒業時までにはたくさん貯金もされています。比較的若い方がくるので「研修しながらお金を貯めて卒業できる」そういう制度になっています。

町からは人材育成費用として年間200万円助成していただいています。研修生1人につき2年間で農楽舎奨励金と就農支度金合わせて186万円渡しています。だから1人につき約200万円かかるので研修生が増えると実際には足りません。奨励金は就農しなくても返済義務がないので、町としてはあまり出せないのです。

一若狭町に定住し農業をする方が多いのはどういう理由ですかね。

【八代】この町で就農する割合が高いのは（57%）、研修中に地域の中で人間関係のベースがくれるので就農定住しやすいというのがあります。農楽舎の実績から、町の農家・農業法人からは「卒業後うちに来てくれ」というようになってきています。1年目の研修から、農楽舎だけでなく地域の農業法人に「研修」という名のお手伝いに行かせています。農繁期なので農家は助かります。ただ合間を見て交流する場も作ってもらっています。お昼を一緒に食べたり、夜と一緒に飲みに行ったりとかですね。そこで農家経営の話とか、卒業後の勧誘（ウチの田んぼ継がないか？）などもされています。また、地域行事に参加するようにしているので、田舎暮らしについてもいろいろ学びます。こうやって地域ネットワークがつけられていきます。

研修生は都会からくるので田舎の密な関係を慣れていません。その点は農楽舎宿舎で共同生活することで慣れてきます。集落行事に参加することによって地域の祭りに参加したり、社会奉仕作業に参加すること

によって農作業が忙しい時期でもそっち優先して勉強していくと、それが一番農業するための近道なんです。周囲の信頼を得て、人の関係を作れば、ちょっとつまずいた時でもやめようかと思わないです。卒業生をいろいろ見っていますが、そこを大事にする人が残っています。何より大事な研修は地域の一員になることです。地域行事に参加する大切さなど、そういったところを一番こんこんと教えています。農作業もしますが、それより重きを置いています。人様に迷惑かけるなどか、草刈はある程度しようとか地域での暮らし方っていうところに重きを置いています。でも、もちろん農作業機械の操作から壊し方、直し方からなんでも教えはします。若狭町で足りないところは県外などいろんなところに行っていたいでいます。

4 家と農地と機械の確保

一卒業生が定住するにあたって住居はどうされていますか。

【八代】町が中心になって、①同一集落内に約3ヘクタールの農地を確保できること、②機械は初期投資せずに貸してもらえる環境にあること、③卒業生とその集落をつなぐ世話人(仲介役)がいること、④空き家があること この4つの条件で場所を探します。例えば認定農家さんから面積をちょっと分けてもらえて機械も貸してもらえるということもあります。空き家もありますが、最初のうちは集落の方が知らない人間に貸すのをためらったりすることもあります。それで、まず町にあるマンションで暮らしながらという卒業生もいました。いきなり集落に住むと、ちょっと違うと思った時に出ていきにくいんです。そこで町が卒業生専用住宅を整備してくださいま

した。まちの保育所の跡地にアパートを4軒、直売所と加工場を作りまして卒業生の家が見つからない場合に2年間限定で住めるようにしました。もちろん、家賃は格安ですが卒業生が支払っています。そして地域で農業しながら人間関係を作って、そのうち空き家も見つかるという具合に、2年以内には農地がある集落で家の確保ができる仕組みができます。研修期間を合わせると、最大4年間は住居の心配がないです。ですが、皆さんほとんどその卒業生専用住宅は早く出ていき農地のある集落に定住してますね。農家のほうから「土地があるからやってくれ、空き家もあるぞ」となっています。そこから先は農地を経営継承して個人で農業するのか、農家と一緒に法人をつくってやるとかになります。

一次の農地の確保の問題ですね。

【八代】最初のころは土地を譲るということをお約束でやっていて、いつから譲ってもらえるのか？そのことにより農地の拡大に伴っての機械の投資などが予測できない、経営の道筋がたたない問題も起こりました。そこで本当に農地や機械を継承するのなら、法人化していくほうがスムーズなのでそういう方式が増えてきました。だから法人が多いんです。とくに規模を大きくしたい人はそっちに行きます。そうでない人は中山間地で有機農業をこじんまりとやっています。

一なぜ法人化がいいのでしょうか。

【八代】法人にして継承すると、その土地や機械は会社の物になります。そのほうが卒業生にもリスクがありません。きちんと契約も結びますので、経営継承もスムーズです。形式は合同会社が多いです。出資金が0円でも可能ですので設立は簡単です。代表は最初は親方がなり卒業生はその社員で給与をもらう方法が多いです。もし問

題が起これば間に行政や農楽舎が入っていきます。どうしても卒業生のほうが力的に弱いので個人対個人で話すだけじゃなくて、行政と農楽舎が間に入って話し合う方がいいです。

―今後、研修生を増やしていく予定は。

【八代】町ではもっと増やしてほしいと考えています。高齢化がすすんでいますから。1～2名でなくもっとたくさん研修生を育成してほしいと言われます。

―なぜ卒業生がこの町に残り、立派な農業をやっているのか、そしてひろく新規就農を促進するうえで何が必要かよく分かりました。かみなか農楽舎の事業の成果ですね。今日はありがとうございました。

5. 農楽舎卒業生の声

深川寛朗氏（合同会社神谷農園代表社員）

京都出身07年卒業(当時22歳)

山本謙氏（米農家）兵庫出身12年卒業(当時24歳)



深川寛朗氏（左） 山本謙氏（右）

―現在の経営面積を教えてください。

【山本】今、7ヘクタールです。去年まで同じ町内の農業法人に勤めていたんですが、そこは12月いっぱいまで辞め、個人で

農業やっています。

【深川】うちは19ヘクタールです。昔は親方とその奥さん、娘さんと4人でやっていましたが、その後親方が亡くなり、今は3人でやっています。パートも1人います。

【山本】基本的に1人ですが、機械を借りている方がいらっしゃってその人に春の作業の苗作りなどを手伝ってもらっています。トラクターとか田植え機を借りて農地自体もその方に借りています。その方ももう75歳で、そろそろ引退しようかなってという時期にさしかかっているところに僕が入らせていただいています。

―その方は親方ですか。

【山本】いいえ、親方ではなく、経営は別でやってます。機械の貸し借りの契約をしています。この方は8ヘクタールの農地を賃貸契約していたわけですが、少し面積を減らしたいということがあり、その面積分を私が地権者と契約して耕作しています。7ヘクタールの農地は13人くらいの地権者から借りています。

―深川さんは親方からの経営委譲ということですか。

【深川】そうです。最初は山本さんのような進め方をイメージしていましたが、県の普及部の方々に会社組織にしたほうがスムーズに経営継承できるといわれて07年に法人化しました。親方はもともと個人経営でしたが、将来経営継承するために親方と会社を立ち上げました。法人の代表権は2年後に譲ってもらいました。そのころ親方の体調も悪くなったこともあったので。その後しばらくは一社員として働いてもらっていました。

―前職をお聞きます。

【深川】私は宮城県の農業短期大学を出て、1年だけ京都府庁のワークシェアリング制度を使って臨時職員をやりました。その後

農楽舎に入りました。親は公務員です。

【山本】石川県立大学で農業土木、生態学を学び、その後農楽舎に入りましたので前職はないです。田んぼに魚を引き入れる魚道などについても勉強していました。親は教員です。

—20代で農業に飛び込んだ理由は何かありますか。

【深川】私は小学生のころから土いじりが好きで、母親とガーデニングなんかしてたので興味がありました。中学生ぐらいの時に、農村の高齢化が進んでいるのを聞いてこれはチャンスかなと思いました。都会で育ったので農村の事はあまり知らなかったので興味本位でした。

【山本】親も都会育ちだったので農家の知識はなかったのですが、大学時代に地方が人口減、高齢化しているのを知って、何かできることはないかと思っていました。

—売り上げは皆さんどれくらいですか。

【深川】19ヘクタールで、年間2300万円くらいです。

【山本】私は今年からなので、正確な決算状況はこれからですが、だいたい500～600万の売り上げですね。かかった経費もまだ集計できていません。

—お二人は有機農業ですか。

【深川】うちは有機ではなく、特別栽培米の区分3（減農薬・無化学肥料）です。それが最高で、慣行栽培のほうが多いです。福井県の認証制度では、特裁の区分1は無農薬・減化学肥料、区分4が減農薬・減化学肥料です。メインは慣行栽培で、2ヘクタールが特別栽培です。それ以外にも作業受託（2ヘクタールくらい）や苗の販売ふくめての2300万円の売り上げです。作業受託は田植えだけとか稲刈りとかです。自社の田んぼだけだと反当り平均10万円の売り上げです。品種によって違いますが平

均7俵（反当り）です。米価についても縁故米・事業者販売・農協と色々です。今年は値段がいいと思うので業者さんで平均1俵15000円くらいで買ってくれるんじゃないかと思っています。

—1俵5万円で売れることもあるようですが。

【深川】それはものによってです。無農薬米とか有機JAS認証とかの場合ですね。色んなプレミアムのコメがありますし・・・私の所ではとてもそんな値でうれませんね。でも農家としてはそういうところを目指して、買いたい人が増えるお米をつくらないといけないと思っています。

—出荷先はどのような割合ですか。

【山本】うちもそれぞれです。相手によって値段は様々です。農協にも出しています。うちはまだ売り先がまだこれからですか、個人縁故米2割、事業者1割、農協7割です。

【深川】うちは個人縁故米6割、事業者3割、農協1割です。

—今後の拡大は。

【深川】増やしていきたいと思っています。周辺の認定農家が経営面積を増やしてきているのでだんだん農地がすくなくなってきました。

—認定農家の基準は面積ですか

【深川】以前は5ヘクタール基準でしたが、今は目標粗収益ですね。だいたい5年のうちに1,000万円の年間粗収益（売上+補助金等）をめざしていきます。

—皆さんの耕作地は、土質はどうですか

【深川】私も山本も川を挟んで隣同士ですが、土質は砂、礫質ですね。川のそばなので、浅地で砂と石が多いです。トラクターの爪がすぐ減ります。量もあまりとれません。それで反あたり7俵くらいなんです。お米はおいしいと言われます。

—研修中に法人や個人農家へのお手伝いがあると聞きましたが、その中で就職先を見つけれん

ですか。

【深川】 私の場合は卒業前に神谷農園に行くことが決まっていたので、秋口に1か月くらいそこでがっつり農作業させていただきました。

【山本】 私の場合は、秋に開かれる農楽舎での担い手交流会で決まりました。研修生と親方とのお見合いの場ですね。自己紹介してお酒飲みながら話をするような。

一経営継承の件ですが、いずれ自分も誰かに継承するときがきますよね。

【深川】 そのために会社になっているので。私は経営継承されていますが、農地は親方も含めて地域の方のものなので小作料を払い、機械も親方にリース料を払っています。小作料は10a（アール）4000円くらいですね。うちだと19ヘクタールで80万位払っています。

一農楽舎の事業・取り組みを振り返ってどうですか。なぜ定住しようと思ったんですか。

【深川】 農楽舎の取り組みが良かったんです。でないと定住しませんでした。

私の場合は、母親の知り合いの人に勧められてきました。初めて訪れて、ああいなと思って。後で知ったんですが、研修時にお金をもらえて、お米中心の農業研修しているところはあまりないと聞きました。お米中心なので野菜作りを目指している人には向いていないと思います。

【山本】 私は、「新農業人フェア」という、農業就活の合同説明会で農業の研修先として農楽舎を知って、ここでやってみようと思った経緯があります。

一農村で暮らしてみて、人間関係はどうですか

【山本】 わずらわしいことはないですね。都会と違って、集落の人は皆知り合いですし。色々聞かれたりしますけど、気にする人は農村移住向かないですね。

【深川】 入口の所ではわずらわしいことも

あるかと思いますが、入ってみると楽しいこともあるんで。

一仕事上田んぼの貸し借りとか共同作業、寄合とか祭りへの参加などいろいろあると思いますが、そんなのも気にならない。

【山本】 全くないわけではないが、どこの会社でもそんなこともありますし。

【深川】 集落の役とかもやっています。正直大変ですけど、田んぼやりたいので。

一これからの農業への抱負は。

【深川】 いかに楽に作業をやるかですね。

【山本】 行政の補助事業がころころ変わるので、経営上困ることがあります。

一国の政策なんかどうですか。TPPなどはどうですか

【山本】 ふたを開けてみないとなんとも言えない。希望しすぎずニュートラルな気持ちです。

【深川】 米価下がるのは覚悟していますが、農家も淘汰されるのは間違いない。そこでいかに生き残るかだと思っています。食料は必要なので、存続可能だと思います。若い人もまた戻ってくるのではないかと思います。機械化もすすんでいるので。展示会にいくとロボットトラクターもありますし。一耕作放棄地はどうですか。町の2,000ヘクタールの農地の1割を卒業生がやっている聞いていますが。

【深川】 うちの田んぼは比較的草刈りに手がかかりません。山手のほうは大変ですね。それに研修中も山手の集落の田んぼの草刈りなんかも毎日やっていたので、今の田んぼは苦にならないですね。

一もっとお聞きしたいのですが、時間がきたようです。またお話を聞かせてください。今日はありがとうございました。